



日本ラテンアメリカ学会 会 報



2025年3月31日

No. 146

1. 理事会報告

○第181回理事会

2. 第46回定期大会開催案内
3. 第46回総会について
4. 地域研究部会報告
5. 研究交流イベント開催案内
6. 学術・国際交流
7. 『ラテンアメリカ研究年報』第46号の原稿募集について
8. 新刊書紹介
9. 事務局から

1. 理事会報告

○第181回理事会

日 時：2025年1月13日（月）14:00～17:30

場 所（開催方法）：Zoomを利用したオンライン会議

出席者：浅香、安保（書記）、磯田、井上、浦部（理事長）、岡田、奥田、川上、菊池、久野、
子安、坂口、清水、杉山、禪野、鳥塚、笛田、和田

欠席者：柴田、柳原

〈審議事項〉

1. 会則の改正

浦部理事長より、学会の資産を管理する銀行口座の代表者名義変更の際に生じる支障を解消するための会則変更の提案があり、次回の総会で承認を得るべく、文言の細部について検討を継続することとなった。

2. 入退会・会員種別変更

磯田理事より、新規入会6名、種別変更5名についての提案があり、承認された。なお、国外からの申請者が1名含まれていたが、例外なく会員による推薦者が必要であることが確認された。

3. 2025年度研究大会

岡田理事より、大会準備状況と報告申込についての報告があった。申し込みが一定数

あったため、追加募集を行わないこと、また大会開催校として一般（非会員）と合同のパネルを企画することの提案があり、承認された。そのほか、託児所については、いくつかある選択肢のうち、先に申請者のニーズをリサーチしてから決める予定であること、ポスター発表の予定があるが、会場準備に問題はないことが報告された。

4. 2025年春季合同研究会

清水理事より、早期キャリアセミナー・地域合同研究会について報告があった。この研究会を「研究交流イベント」と改名し、非会員の申込が可能で、討論者をつけないやり方にする、また会場使用料と飲食代の予算を計上することが提案され、承認された。

5. ウェブサイト・ニュース配信

和田理事より、前担当理事のアルバイトの引き継ぎで、2023年12月－2024年12月分の業務代が未払いだったため、今年度の予算から出すことになることが報告され、承認された。なお、最低賃金が増していることから、今後大学の規程も踏まえて、適正なアルバイト代を設定することが確認された。

6. 学術会議・国際交流

坂口理事より、理事会でメール審議された早期キャリアの定義について確認が行われ、加藤勲会員への補助申請が承認された。ただ定義文については、次の総会で諮る際により適切になるよう修正案を検討していくこととなった。また、補助制度の周知の仕方、申請書類の内容、競合した場合の選抜のあり方などについて、引き続き検討を行うことが確認された。

〈報告事項〉

1. 理事長

浦部理事長より、1) 会員・会費制度、2) 退会の取り扱い、3) LASAの地域学会、4) 地域研究部会の補助について、以下のような提案と報告が行われた。

- 1) 会費制度について、以下4点の改正案の素案が出され、今後検討を進めていくこととなった。
 - ・地域研究部会のオンライン化、会報や年報のオンライン化などの進展を勘案しての休会制度の廃止。
 - ・一定の要件を満たしたシニア会員の、一定額の一括払いで終身会員になる権利の制度の創設。
 - ・年会費制度の簡素化（一例として常勤職にある者を7千円、そうでない者を3千円とする会費の二分化）。
 - ・賛助会員制度の見直し。
- 2) 会費未納のまま退会申込みがあったときには、その時点での意思が尊重されるべきであり、未納分を納めてから再度退会申込みの提出を求めることは避けるべきであるとのことが申し合わせとして確認された。
- 3) 11月にメルボルンで開催予定のLASA Oceania y Asiaに関し、LASA側から交流が呼び掛けられており、若手で発表希望者がいれば、研究助成枠を増やすことを検討してもよいのではないかと案が出された。

- 4) 地域研究部会に関し、院生から旅費の補助がないかという問い合わせがあった。かつては5千円を上限とする制度があったが、現状では3つの地域研究部会がオンラインでも参加可能になっているため必要性は高くない。しかし今後、定期大会などへの参加に関して何らかの助成を検討する余地はあるという考えが示された。
2. 事務局

磯田理事より、オンライン決済の導入状況について報告があった。メールが届かない会員への対応として、国際文献社に依頼すると郵送費用がかかる上、反応がない可能性があるため、まず理事会内で該当者の情報共有を行なって可能な対応を取ることとした。

また『年報』原稿の転載許可申請の報告があり、これが承認された。
3. 会計

柴田理事が欠席のため、浦部理事長の代読で、口座残高の説明が行われ、第45回定期大会の会計報告が承認された。

大会経費の計上方法として、大会準備経費の振り込みは4月に行われるが、実際にはその前から準備費用が発生していて、それは予備費で賄われている。そのため大会経費が正確に把握できていない問題がある。準備経費を段階的に分けて振り込むことも考えられるが、会計の年度区切りがあり、振り込み手数料も発生するため、今後の検討課題とした。
4. 2025年度研究大会

岡田理事より、大会支援理事の井上理事、笹田理事とプログラムを準備中であることが報告された。
5. 会報編集

安保理事より、会報145号が11月30日に刊行されたと報告された。

川上理事より、会報146号の目次案が出され、承認された。
6. 年報編集

菊池理事より、『年報』の投稿状況が報告された。また国際文献社への業務委託について、投稿査読システムの構築に向けた準備を進めていると報告された。

奥田理事より、J-STAGEおよび国立国会図書館からのアンケート依頼があったことが報告された。そのうち、プレプリントについてはその方針を検討することとしたが、発表資料などの保存については、人文系では不要ではないかという考えが示された。
7. 2024年秋季研究部会

東日本研究部会について、参加した浅香理事、杉山理事より、10名の参加があり、活発な議論があったことが報告された。

中部日本研究部会について、浅香理事より、リマ、マドリッド、東京をつないで開催したことが報告された。

西日本研究部会について、禪野理事より、ハイブリッドで4つの発表が行われ、その後懇親会も開催されたことが報告された。
8. ウェブサイト・ニュース配信

和田理事より、HP上の『年報』のバックナンバーについて相談があった。『年報』は2022年以降、J-STAGEのリンクから閲覧することになっているが、それ以前のバックナンバーはHPに掲載されたままである。これを消去してJ-STAGEに絞れば検索回数を

伸ばすことが可能になる。しかし利用者にとってのアクセスのしやすさも考慮する必要があるので、すぐには手をつけないこととした。

9. 学術会議・国際交流

坂口理事より、JCAS、JCASAに参加し、査読のあり方について他学会から興味深い情報共有があったことが報告された。

2. 第46回定期大会開催案内

第46回定期大会は、2025年6月14・15日に名古屋大学東山キャンパスにおいて、対面形式で実施されます。多数の個別報告、パネル報告、ポスター報告、共催校報告のお申し込みをありがとうございました。2月17日付で採択結果をお送りしております。万が一不着の場合は実行委員会までご連絡ください。報告ペーパーの提出締切日は5月24日を予定しております。記念講演には、メキシコ大学院大学のイラン・ビッツベルグ教授を招聘します。

今後、託児サービスの利用希望の有無について、ウェブアンケートの形式でお尋ねする予定です。ご利用の可能性のある方はご回答をお願いいたします。もし利用をご希望される方で学会からのメール配信を受け取っておられない方がいらっしゃる場合には、3月31日までに実行委員会までご連絡ください。諸々の都合上、直前での利用希望に十分に対応できない可能性がありますことを予めご承知おきください。

また、大会当日にはビジネスミーティングにご利用いただけるような控室を用意する予定です。こちらについてもご案内差し上げますので、ご利用希望がある場合はご回答くださいますよう、お願い申し上げます。

【実行委員会連絡先】

第46回定期大会実行委員長 岡田 勇（名古屋大学）

メールアドレス：ajeltaikai2025@gmail.com

ポータルサイト：<https://ajel2025.blogspot.com>

3. 第46回総会について

2025年度大会（開催校：名古屋大学）の初日6月14日（土）に、日本ラテンアメリカ学会第45回総会が開催されます。今回の総会では、会則の一部変更についてお諮りします。会員各位におかれましてはご出席をよろしくお願いいたします。出席が難しい場合は、委任状の提出について追ってご連絡を差し上げますので、ご対応をよろしくお願いいたします。

（理事長）

4. 地域研究部会報告

〈東日本研究部会〉

東日本研究部会は2024年12月8日（日）、14時から16時までオンラインで開催され、10名が参加した。

報告者は久野量一会員（東京外国語大学）で、タイトルは、当初申請したものから軽微な変更があり、「地域性と普遍性——ファン・ガブリエル・バスケス『歌、燃えあがる炎のために』とポストコンフリクトの文学」となった。久野会員自身が翻訳出版したばかりのコロンビアの作家バスケスの短編集をめぐって「ポストコンフリクトの文学」の観点から分析したものだ。

まずは近年のラテンアメリカの作家の中では群を抜いて数多く訳されているバスケスの経歴と、その重要性について概説し、その後、『歌、燃えあがる炎のために』所収の緒短篇のあらすじやその背景、登場人物のモデル、出来事のモデルなどを紹介した。モデルとなる人物や事件の存在は、バスケスがそれだけコロンビア社会に密接に関連した作品を書いていることの証左であろう。

しかし、そうした実在の事件を表現するのにルポルタージュや「証言の文学」とも異なる、短編小説の形式で発表するに際してバスケスがとった工夫を普遍化の努力として解説、解明するというのが久野会員の発表の主旨であった。装幀に使われた写真（炎の写真）のようないわばパラテキストを巡る話から始まって、語りの形式までにいたるバスケスの試みを分析した。『歌、燃えあがる炎のために』所収の9つの短篇のいずれもが、誰かの話を作家バスケスと同定される人物が語り直す形式になっている。この非当事者性がバスケスの小説の核心だとの認識が発表者の論の主眼である。こうした語りが、言うところの「証言の文学」と異なるところは、これが当該の事件の当事者にも読まれるために書くという姿勢にあるのだとの仮説も、もうひとつの重要な論点であった。語り手である「私」すなわちバスケスと思われる人物が、事件から離れているようでありながらもまったくの遠くにいるわけでもないという、絶妙な距離を取っているのだとのこと。

当初討論者を予定していた人物が急な校務で出席ができなくなったので、司会の柳原が討論者の代わりを努め、語り直し（たとえばホーソンのTwice-Told Tales）は小説の基本と言えるスタイルであるし、一方で、いわゆるオートフィクションの体裁であることも、バスケスの正統派の小説家としてのあり方を示しているようだとコメントした。近年のオートフィクションはフランス文学において語られるようになり、スペイン語圏にも波及した語りの形式だとされるが、そうした概念の流行以前からボルヘスは作者本人とおぼしき語り手の手になる語り直しの短篇を書いてきた。ガルシア＝マルケスやバルガス＝リョサの一部の作品も独自のオートフィクションのあり方に寄与しているように思うが、フランスでラテンアメリカ文学について博士号を取得したバスケスならではの態度といえそうだというのが柳原のコメントの主旨。

その後、出席者からの質問を受け付けた。必ずしも文学研究者でない出席者たちからは「ポストコンフリクト」の時代についてや「証言の文学」としてのリゴベルタ・メンチュウとの対比などについての質問がなされ、活発な議論が展開した。オンライン開催ということもあって発言が気楽だったのかもしれないが、出席者全員がまんべんなくならんかのコメントをし、白熱した2時間であった。

柳原孝敦（東京大学）

〈中部日本研究部会〉 2024年度第1回研究会

中部日本研究部会では、以下の日程・内容で研究会を開催した。今回は招待講演も企画された。リマ、マドリッド、東京からの参加のため、時差を考慮し午前の部と午後の部に分けて実施した。参加人数は午前の部10名、午後の部12名であった。最新の研究成果が報告され、討論者、参加者からも活発な質問コメントがあり、実りの多い研究会となった。研究会後にはオンライン懇親会も開催され、交流を深めることができた。

中部日本研究部会担当理事 浅香幸枝／杉山知子
運営委員 丹羽悦子

【日時】 2024年11月30日（土）

午前の部 招待講演 10:00～12:00（リマ時間 20：00～22：00）

午後の部 研究部会 13:30～15:30（マドリッド時間 5：30～7：30）

【開催形態】 オンライン（Zoomミーティング）

【プログラム】（敬称略）

午前の部 招待講演 10:00～12:00（リマ時間 20：00～22：00）

講演者：

Omar Manky Bonilla（Universidad del Pacifico, Profesor asociado（准教授）、名古屋大学国際開発研究科、2024年度外国人客員教員）

Título:

Construyendo el capitalismo académico latinoamericano: Negociando la reforma universitaria en Perú (2014–2024)

Resumen:

La presentación analizó la reforma universitaria peruana (2014–2024) desde una perspectiva que enfatiza el papel de los actores locales en la configuración del capitalismo académico. A diferencia de interpretaciones que ven la mercantilización educativa como proceso inevitable, se mostró cómo sus resultados dependen de negociaciones entre grupos de interés. El análisis se centró en dos niveles: A nivel macro, se examinó cómo dueños de universidades y rectores utilizaron recursos institucionales (tribunales, congreso) para resistir cambios que limitaran su capacidad de acción. A nivel micro, se exploró cómo los docentes negociaron las nuevas reglas sobre investigación y calidad educativa. La discusión posterior profundizó en cómo estas dinámicas produjeron un capitalismo académico con características específicas, marcado por la búsqueda de beneficios a corto plazo a través del control de recursos institucionales más que por la generación de valor mediante producción e innovación. Este caso ilustra la importancia de teorizar las variedades de capitalismo académico en América Latina, atendiendo a las particularidades de cada contexto nacional. La discusión posterior a la presentación tocó varios puntos relacionados, incluyendo las perspectivas de los padres que aceptan las universidades nuevas de menor calidad, la empleabilidad de los egresados de las mismas, reproducción intergeneracional de los docentes, y el rol de Superintendencia Nacional de Educación Superior Universitaria (SUNEDU), entre otros. Fue una discusión fructífera y enriquecedora no solamente al Perú sino también a otros países en Sudamérica e incluso a Japón.

休憩

午後の部 研究部会 13:30～15:30

第1報告：工藤瞳（慶應義塾大学）13:30～（発表30分、質疑応答20分）

「チリの学校包摂法は誰を包摂したのか—入学調整制度（SAE）の影響—」

討論者：三浦航太（アジア経済研究所）

概要：

チリでは2015年制定の学校包摂法下で、国庫助成を受ける学校への入学を国が一元的に管理する入学調整制度（SAE）が導入された。入学調整制度導入背景には、学校間での生徒の社会経済的な棲み分けが深刻化したことがある。報告者による現地調査や先行研究によると、入学調整制度導入後、同制度は生徒の社会経済的な棲み分けにはあまり影響していない。一方で、特別な教育的ニーズを持つ生徒などの包摂に影響があった、との指摘がある。また報告では、社会経済的な棲み分けに「影響していない」ことに対する研究者や政治家の評価は分かれており、政治状況によっては揺り戻しの可能性があることを指摘した。

討論者からは、本事例について「半世紀近くにわたる『新自由主義vs国家の介入強化』という対決の象徴」とのコメントがあった。また、入学調整制度の影響があまり見られない理由としての親の選好の捉え方、制度への評価の解釈、制度の今後に関する質問があった。特に制度の今後に関して、さらなる国家介入の強化に進む可能性は低いのではないか、という議論になった。参加者からは、同制度で試験による選抜枠も縮小・廃止予定であることの政策的背景・意図を問う質問があった。これに対して、学校での教育の結果ではなく入試で成績の良い生徒を選抜した結果、学校の成績が良くなっているという見方があったことを指摘した。

休憩

研究紹介：Arturo Mila (PhD en comunicación por la Universidad de Santiago de Compostela)

14:30～（マドリッド時間 6:30～）（発表30分、質疑応答20分）

QVADRATA Año VI Núm. 11 (2024): enero-junio de 2024掲載論文の紹介（「Migración con rostro de mujer. Una visión interpretativa desde la Investigación Basada en las Artes (IBA)」）

討論者：Ruben E. Rodriguez Samudio（早稲田大学）

概要：

Según el Alto Comisionado de las Naciones Unidas para los Refugiados (ACNUR), para junio del 2024 la cifra de ciudadanos venezolanos que han emigrado fuera de su país de origen ascendía a cerca de 7.7 millones de personas. De este número, un 51,9% mujeres. Esta cifra es mayor a los éxodos generados por conflictos bélicos que involucran a países como Siria -6.8 millones de personas- o Ucrania -con 6.3 millones de refugiados. Asimismo, entre otras problemáticas, las mujeres refugiadas y migrantes de Venezuela enfrentan más barreras para acceder a un trabajo formal que sus pares varones, incluso en condición migratoria regular. Por ejemplo, La tasa de desempleo de las mujeres refugiadas y migrantes de Venezuela en América Latina supera -incluso duplica- (en dependencia del país) la de sus connacionales varones.

Con base en lo anterior, se presentó una perspectiva artística de la migración femenina, desde una serie de retratos (grafito/carboncillo, sepia, sanguina, lápices de colores y óleo sobre lienzo) y

la técnica cualitativa de investigación basada en el arte y la etnografía. Las 41 mujeres seleccionadas para los 45 retratos son migrantes venezolanas menores de 30 años. Resulta de interés reseñar parte de estos procesos, de cara al nuevo arquetipo independiente del género femenino presente en el siglo XXI, como una mirada del proceso migratorio que puede estar dotado de cualidades positivas. Esta es una iniciativa impulsada por quien es a su vez un migrante, aportando una visión propia de la realidad del género, y una lectura subjetiva e interpretativa de expresiones armónicas, donde se encuentra una propia identidad. En estas imágenes no hay contextos, sino que está ensimismado en cada retrato; forma parte de sus cualidades, del estilo optado para plasmar los rostros. Comparten serenidad y armonía, necesarias para hacer frente a dificultades que típicamente se pueden presentar en el género femenino.

〈西日本研究部会〉

2024年12月15日（日）13時より17時まで、西日本研究部会が対面（関西学院大学大阪梅田キャンパス）とZoomによるハイブリッド形式で開催された。報告者は4名で、それぞれに討論者がついた。参加者は対面10名、オンライン6名の計16名で、報告者も含め、西日本に限らず多様な地域からの参加があった。質疑応答もさかんに行われ、充実した研究部会となった。発表要旨は以下の通りである。

禪野美帆（関西学院大学）

第1報告

El bienestar y las habilidades no cognitivas en una escuela latinoamericana:

Los efectos de las actividades especiales japonesas (Tokkatsu) en estudiantes peruanos

発表者：Jakeline Lagones（関西外国語大学）

討論者：浅香幸枝（南山大学）

Los diversos estudios han evidenciado que las habilidades no cognitivas son fundamentales en la formación educativa, ya que contribuyen al social y económico de los niños, como miembros de la sociedad. Por consiguiente, en la presentación expliqué cómo la práctica de actividades no cognitivas (*Tokkatsu*) impacta en los estudiantes, y promueve el bienestar educativo. Asimismo, expuse el desarrollo de las dos etapas del proyecto “*Osoji-japan*”, durante y después de la pandemia de COVID-19.

A nivel mundial, en el caso de los países en desarrollo, como en América Latina, no existe experiencia previa con *Tokkatsu*. Por consiguiente, mediante la utilización del método mixto, este estudio profundiza en la relevancia de las habilidades no cognitivas para la educación de los niños latinoamericanos. Su propósito principal es aplicar ciertas características del modelo japonés *Tokkatsu* a las necesidades de las escuelas públicas peruanas. La propuesta de este proyecto se enfoca en los Objetivos de Desarrollo Sostenible (ODS), cuyo propósito es priorizar la educación para el desarrollo sostenible y los hábitos de vida sostenibles.

Según la opinión de los críticos, se destacó que en América Latina se evidencia ampliamente que la educación al estilo japonés constituye el fundamento del progreso de Japón. En Perú, México y

Argentina, donde se encuentran comunidades japonesas, las escuelas dirigidas por la comunidad japonesa se han convertido en las principales instituciones educativas a nivel local. Asimismo, el proyecto en la región de América Latina es significativo, ya que la población de origen japonés en América Latina representa menos del 1 % de la población total en cada región. En consecuencia, la premisa fundamental para el éxito de los proyectos comunitarios radica en establecer vínculos cordiales con la población que no es originaria de Japón también.

第2報告

宇宙の垂直性と11層の物質化

発表者：丹羽悦子（南山大学大学院博士課程前期研修生）

討論者：岩崎 賢（神奈川大学）

古代メキシコ中央高原の民族誌史料には、天上界や地下界の層が13や11、9などの整数を用いて記載されている。これらの層の存在は、征服期におけるヨーロッパの影響を受けたものか、先スペイン期からすでに存在していたのか、2つの見解がある。本報告は、考古天文学の視座から先スペイン期の層の存在について再考を行った。

これまでの考古天文学では地上面における線形構造についての研究報告は潤沢であるが、垂直性のある層や高度についての研究事例は十分とは言えない。その一方で本報告は民族誌史料に恒星時を基準とする天体の動きが記載されている事例を確認し、考古天文学においても恒星時を示す現象、すなわち恒星が回転している現象を重視する必要があると考えた。そこで回転する恒星と層の高さとの関係に着目し、子午線上の恒星がどの高度まで昇っているか天文シミュレーションソフトを用いて調べた。その結果、ふたご座のカストルが歳差運動の影響をほぼ受けず、古典期から後古典期後期に至るまで11層の高度を示していたことが明らかとなった。さらに恒星の高さを地上の長さの単位に換算した場合、11層の高度が地上の距離に物質化されていると考えられる事例を考古天文学の視点から指摘した。

討論者からは、天文学の観点をより民族誌史料の解釈に取り入れるよう建設的な助言があった。参加者からは考古天文学全般についての質問があった。

第3報告

ブラジルにおける沖縄県系人の音楽実践に関する研究

——サンパウロのおきなわ祭りを見る「沖縄」

発表者：加藤 勲（独立研究者）

討論者：宮本愛梨（関西学院大学）

本発表では、1908年に始まった「移民政策」によって、沖縄県内からブラジルへと移住した人々とその家族である沖縄県系人（以下、県系人）による文化実践の内の、「沖縄」の音楽について報告した。本研究は、在ブラジル県系人による沖縄の音楽を対象とした研究を踏まえたものである。現地調査から、これまでに論じられてきた、県系人による沖縄という「本場」を目指した実践とは異なる文脈の沖縄の音楽実践を確認した。この音楽は沖縄や琉球、エイサー、ウチナーといった、直接的に沖縄県内との関係を表す言葉や、三線やパーラ

ンクーなどの沖縄の楽器が用いられることから、沖縄に関連する文化であることは明らかである。この音楽を録音し音源を波形解析し分析したところ、ブラジル文化の音楽であるサンバと同様のリズムの特徴を持つことが明らかになった。つづけて沖縄県内の音楽家による演奏も波形解析して県系人の沖縄の音楽と比較したところ、両者は異なるリズム感覚で同じ音楽を表現していることも明らかになった。この分析結果を資料として、ブラジル文化の文脈で県系人によって表現される沖縄の音楽と、祭りに訪れるサンパウロ市民への影響について報告した。

分析の対象とした県系人による沖縄の音楽は、サンパウロ市政府が市の公式行事として2016年に「沖縄の文化、芸術、舞踊、音楽、料理、風習をサンパウロ市民にむけて発信する祭り」と規定した、おきなわ祭り（Okinawa Festival）で演奏されたものとした。

討論者から、県系人の音楽に見られた、ブラジル音楽の特徴であるテレコ・テコ（Teleco-Teco）についての説明の要望があり、その場にある物で即興的に演奏することで、発表で指摘したりリズムを示した。

会場から、祭りと市民との関係について質問があった。市の公式、非公式の祭りへのサンパウロ市民のかかわり方は、表現者と受容者の相互作用が含まれる音楽を対象とした研究に外すことのできない視点であり、重要な指摘をいただいた。

第4報告

トリニダード・トバゴにおける移民の統合

——ベネズエラ移民に対する教育支援の進展

発表者：鈴木美香（福岡大学）

討論者：工藤 瞳（慶應義塾大学）

トリニダード・トバゴ（以下TT）政府は2023年に公教育でベネズエラ移民児童の受入れを認める方針に転換した。本報告はTTの教育分野でベネズエラ移民の統合がどの程度進んでいるかを明らかにすることを目的にしている。TTでの関係者への聞き取り調査の結果、TT政府が課す要件や家族の事情等により実際に公立校に入学を果たした児童は僅かで、大部分は教育にアクセス出来ない状況が続いていること、その代替として国際機関やNGOによる遠隔／対面授業、無認可の私塾による授業が行われている旨示した。

討論者の工藤瞳会員からはベネズエラ人の減少に伴いTTとして今後支援を拡大する方向には動かないのではないか、滞在長期化の見通しが無いベネズエラ人自身TTへの統合を必ずしも望んでいないのではないかという指摘とともに、ベネズエラ人保護者の教育に関する考えやTT以外の受入れ国の事例・先行研究から得られる示唆について質問があった。当方からは、ベネズエラ人の多くは帰国もしくは第三国への移住を希望しつつも、TT滞在中は現地社会で安心した生活を送り子弟にスペイン語も英語も学んでほしいと考えており、統合を拒否している訳ではない旨回答した。また、小国のTTの場合は大量の移民受入れの歴史がなく、公用語は英語のため、ベネズエラ人の主要受入れ国や移民・難民の受入れの歴史が豊富な先進国とは異なる問題を抱えている旨説明した。

5. 研究交流イベント開催案内

日本ラテンアメリカ学会では、若手を中心とした研究者の世代間・分野間の交流を目指し、以下の要領で研究交流イベントを開催いたします。つきましては、研究報告を募りますので、ぜひご応募ください。(会報発行時にはイベントは終了しています)

【日 時】2024年3月29日土曜日 13時からを予定

【開催場所・形式】対面とオンラインのハイブリッド

上智大学四谷キャンパス 2号館の411教室(2-411)及びZoomによるオンライン

【応募資格】日本ラテンアメリカ学会会員(特に大学院生、PD等)のほか、本学会の活動に関心を持つ方。学会員でなくても応募できます。

【報告内容】

- ・大学学部生の卒業論文、修士論文、博士論文などのほか、研究の中間報告、研究動向報告、共同研究報告、他の地域との比較研究など、ラテンアメリカに関連する広範囲での個別発表が可能です。
- ・報告者の居住地は問いません。国外からも参加できます。
- ・定期大会・地域研究部会での発表や論文投稿前のアイデアの段階から報告できます。
- ・本イベントで報告した内容を修正し、定期大会または地域研究部会で報告することができます。
- ・報告は20分程度を予定しています。報告後、質疑応答、意見交換をし、報告内容について参加者同士で気軽に相談し合える雰囲気づくりを目指します(討論者なし)。

【その他】

終了後学内にて、世代・分野を超えたラテンアメリカ研究者の交流・ネットワークづくりの場として懇親会を予定しています。気軽に是非ご参加ください。

【報告申込先】

3月15日までに、以下の情報を担当理事の清水達也までメールでお知らせください。
(メールアドレス:tshimizu*mail.doshisha.ac.jp *を@に変更する)。

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 論題、(4) 200字程度の発表要旨、(5) 発表形式(対面形式かオンライン形式か)

(担当理事:清水達也・子安昭子・杉山知子)

6. 学術・国際交流

1. 学術会議

当学会は、地域研究コンソーシアム(JCAS)、地域研究学会連絡協議会(JCASA)に加盟している。JCASはさまざまな国・地域に関する地域研究を実施する大学や研究所、NGOなどの連合組織であり、一方JCASAは地域研究系の国内学会の協議会である。

■地域研究コンソーシアム(JCAS)2024年度年次集会、第14回JCAS賞授賞式

2024年11月30日(土)、ハイブリッド形式で開催された。

(1) 第14回JCAS賞授賞式

第14回（2024年度）JCAS賞の受賞作は以下の通り。

- ・研究作品賞：工藤晶人『兩岸の旅人：イスマイル・ユルバンと地中海の近代』東京大学出版会2022年。
- ・登竜賞：金悠進『ポピュラー音楽と現代政治：インドネシア 自立と依存の文化実践』京都大学学術出版会 地域研究叢書46 2023年。
- ・研究企画賞：須永恵美子・熊倉和歌子「イスラーム・デジタル人文学の開発」
- ・社会連携賞：NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク（SNET台湾）「台湾研究の学術的研究成果に基づく学習支援活動」マナラボ 環境と平和の学びデザイン「地球たんけんたい」。

(2) 一般公開シンポジウム『地域研究の学術的貢献を活かす制度を考える』

日本の地域研究を牽引されてきた地域研究者4人による報告と問題提起を受けて、2人のコメンテーターとフロアからの活発な質疑が行われた。地域研究の学術的貢献とは何か、2000年代以降の地域研究の広がりや学術動向の変化（専門性の高いジャーナルでの英語論文の重視、短期間に求められる研究成果など）の中で、地域研究の学術的特徴を活かすための制度設計などについて議論された。

■地域研究会連絡協議会（JCASA）2024年度年次総会

2024年12月14日（土）にオンラインで開催された。

(1) JCASA運営について

2024年度事業報告と会計報告が行われ、それぞれ承認された。

(2) 日本学術会議、地域研究コンソーシアム（JCAS）からの情報共有、活動報告

- ・日本学術会議の法的位置づけが変えられようとしている件について（特殊法人化?）。それに伴い予算措置や会員の選び方なども変更になることが予想されるが、現時点では不明。
- ・JCASからは上述のとおり11月30日の年次総会でJCAS賞各賞が発表され、シンポジウムが実施されたことが報告された。

(3) その他の意見交換

東南アジア学会から以下2点について問題提起があり、情報交換がされた。

①国立国会図書館から、学会誌などの出版物に加えて定期大会などにおける発表資料（発表スライド）などの提供が呼びかけられている件について。

- ・大半の学会は、学会誌など印刷物のみ提供している。発表スライドなどを提供している学会はなかった。
- ・オンライン・ジャーナル（紙媒体なし）の場合、国立国会図書館への納入はどうなるのか?→本学会では2025年度以降紙媒体が廃止されるため、確認が必要。

②学会誌の査読をめぐる困難について：

- ・地域研究系の学会では多様な専門の会員からなり、学会誌への投稿論文が異なる専門の査読者にあたると研究の意義が適切に評価されにくいという意見、分野横断的で挑戦的な研究をするよう促される一方で、査読においては論文の挑戦性は積極的に評価されづらいという意見が出された。

- ・学会外の専門家に謝金を支払って査読を手伝ってもらっている。
- ・査読が学生指導のようになり、時間と労力がかかる。とくに留学生の場合日本語のネイティブチェックを受けずに投稿されると苦勞するため、投稿票に「指導教官が確認しました」というチェック項目をつけた。
- ・中堅からシニアの研究者が学務などで多忙であるため、投稿の大半が若手（学生を含む）の投稿となっているが、育成課程にある彼らに対して査読者が学術論文としてすべてのファクター（先行研究の十分なレビュー、データや方法論の適切さやオリジナリティ、理論的貢献など）において優秀さを求めてしまい、その結果査読を通る原稿が少なくなり、学会誌の継続発行に困難を極めている。
- ・日本マレーシア学会では上記の問題に対して、投稿原稿は上記の学術論文の諸ファクターのすべてではなくても、そのいくつかにおいて学術コミュニティに対して貢献となる要素があれば掲載の方向で評価する方針を決め、それを査読ガイドラインに盛り込んだ。同ガイド欄はその場で他学会にもシェアされた。
- ・「研究ノート」を例えば「萌芽論文」などと名称を変える工夫をする学会もある。日本マレーシア学会では、上記要因のいずれかで学会コミュニティに対して貢献があると認められれば、すべて「論文」とカテゴライズして公開している。

2. 国際交流

早期キャリア支援制度として、(1) 国際学会報告助成、(2) 研究助成奨励賞（国際共同研究）、の2つが制定されている。そのいずれも、以前は4カ月ごとの理事会で1人ずつ決定することになっていたが、時期にかかわらず原則として年3人までとすることが理事会で決定された。

(1) には1件（12/3）、(2) には2件の申請（5/15、9/18）があり、理事会による審議の結果、いずれも承認された。上記3件の助成金は、いずれも国際学会報告、あるいは国際共同研究の結果が当学会内で報告され、必要書類が提出され、承認された時点で支出される。

（担当理事：坂口安紀）

7. 『ラテンアメリカ研究年報』 第46号の原稿募集について

『ラテンアメリカ研究年報』 第46号の原稿を募集いたします。2025年6月、9月、12月、2026年3月と、年4回の締め切りとなります。順次、査読を行い、掲載が決まった論文からJ-STAGEにて公開いたします。若手から中堅、ベテランまで、多くの会員からの活発な投稿をお待ちしています。

8. 新刊書紹介

清水達也編著
『ラテンアメリカ経済入門』
アジア経済研究所、2024年、251頁。(紹介者：受田宏之 東京大学)

因果推論と生成型AIの時代にラテンアメリカ経済論のテキストを書くことは、ハードルの高い試みである。特定地域の経済を理解するには、工学的な分析手法だけでは不十分であり、歴史を学びつつ、考える拠点となる「現場」を持たねばならない。さらに、AIの情報と差異化を図るには、論述の正確さだけでは足りず、読者に批判的な思考を、異なる理論や「現場」をつなげて斬新なナラティブを紡ぎ出す習慣を、促すものでなければならない。地域経済論の存在意義が問われる時代に、本書はラテンアメリカ経済を学ぶことの意義と喜びを伝えるテキストとなっている。

冒頭で、本書は具体から抽象へという構成になっており、読者は具体的な「現場」をできれば2つ選び、内容と照らし合わせて欲しいと説く。第一部「現代の課題」では、イントロでラテンアメリカの共通性と多様性が示された後に、貧困と格差を最初に取り上げている。貧困・不平等指標の解説と近年におけるその改善に加えて、改善の一因をなす条件付き現金給付の普及と限界が指摘される。関連して、保健指標や教育指標でも改善がみられる一方で、教育の質の低さやコロナ禍の露呈した保健制度の不備が示される。セイフティネット的な意味合いを持つ一方で生産性の低さという欠点を抱えるインフォーマル経済については、それが高い比重を有する理由とあり得る対策が厳密に論じられる。最近ではハイチやベネズエラの危機に伴う移動が注目を浴びるヒトの移動についても、その経済的要因と政治的課題が提示される。開発と環境の相克という現代世界の重要課題についても、資源開発の便益は大企業や国家に集中する一方で、環境破壊という負の外部性を脆弱層が負担しがちな状況をめぐり、市場を介した解決方法と介さない方法が紹介される。国際開発については、優れた取り組みの紹介を通じて、その意義と様々なかかわり方のあることが示される。

第二部「経済の仕組」は貿易から始まる。従属論と非完全競争の貿易論には対話の余地のあることが論じられる。続く一次産品を扱った章では、「資源の呪い」論を紹介し、安定化基金の設立や高付加価値過程への参入を通じての不利の軽減を説く。工業化については、メキシコの自動車産業とブラジルの航空機産業の検討を通じて、輸出志向か輸入代替かという二者択一を迫る議論が陳腐なことに加え、(高付加価値を生む)製造前と製造後の活動への進出の必要性が指摘される。経済成長論を扱った章では内生的成長論と新制度学派の説明力が高く評価されている。対外債務とインフレというマクロ経済運営上の二大課題については、その経済学的説明と対策について論じた後、支出の増加を求める政治的現象でもあるが故の再発リスクが示唆される。

最後に、第三部「経済の成り立ち」では、プレビッシュの議論を丁寧で紹介しつつ、輸入代替工業化のナラティブの歴史的背景と限界が論じられる。続いて、現代のラテンアメリカを特徴付ける新自由主義についても、経済学者と非経済学者の間で、さらに経済学者の間でも国家の役割をめぐる認識に差のあることが紹介された後、国家の失敗を踏まえれば市民社会の役割が重要になるという指摘がなされる。

用語解説を含め250頁と適量だが、何か付け加える余地があるとすれば、社会規範や政治制度を含む制度の役割についての論述の充実だろうか。できるだけ多くの研究者や学生、国際開発や移民問題に関心のある市民に本書を手にして欲しい。

富田晃

『ルソーと人食い—近代の「虚構」を考える—』
共和国、2024年、328頁。(紹介者：柳原孝敦 東京大学)

スーザン・バック＝モースの『ヘーゲルとハイチ』が衝撃的だったのは、ヘーゲルが『精神現象学』の中で展開した、主体の形成を巡る「主人と奴隷の弁証法」という比喻が、ハイチ革命のインパクトを基に書かれたと論じていたからだ。ヨーロッパの文物にある植民地言説を批判するポストコロニアル批評のとりあえずの第一の局面が、ヨーロッパの人々が植民地について書いたテキストの中にその偏見に満ちた言説を読み取るというところにあったのだとするならば、これは植民地とはまったく無関係を装う、ヨーロッパの、というよりは普遍的な人間の問題を扱った哲学にも、植民地の存在が大きく影を落としていたことを実証したのだから、いわばポストコロニアル批評がそこで新たな、第二の局面に入ったのだとみなしてもいいだろう。それくらいのインパクトであったのだ。

富田晃の『ルソーと人食い』の試みは、そうしたバック＝モースばりの野心に満ちたものだと理解していいだろう。ここで富田が行っていることは、ルソーの「人間」観が、「人食い」(カニバル)に對置すべき概念として形成されたということを読くことであったのだから。人間という普遍の概念も植民地の存在なしには浮上しなかったのだ。旧植民地(アメリカス)を舞台に複数人間性(つまり、人文学)を論じる私たちとしては、無関心でいられるわけではない。

まず、ヨーロッパと新大陸との出会いから「カリブ」と同語源の「カニバル」が人食いを表す語としてヨーロッパの言語と人々の認識の体系に位置づけられ、さらにはそれが野蛮人全般の代名詞となるに至った言説形成の歴史を丁寧にとどった富田は、モンテーニュや『テルトル神父の博物誌』を通じて「カライブ(カリブ)人」への認識を形成したルソーが、ホップスやロックといった先人を仮想敵としつつ「カライブ人」すなわち「未開人」を子供と見立ててその人間観を形成していく過程をルソーのテキストに読み取る。

中心的に扱われているのは『人間不平等起源論』と『エミール』であるが、『言語起源論』や『新エロイズ』『告白』などにも展開すれば、より広い範囲での「人間」もしくは「人間性」について批判が可能になるだろうとの期待を抱かせる。しかし、そこに話を広げるのではなく、富田は自らの立場からルソーおよびその受容批判へと論を転回・展開していくのだ。

まず、ルソーがその「人間」の概念を形成するに際して軽蔑し、「人間」に對立するものとした無文字社会にも、独自の知のあり方があるのだと示すのである。ガリフナ研究者としての富田の立場からのルソーへの批判である。

一方、教育学部教員としての富田の立場からは、日本の教育学および教育現場におけるルソーの神話化というべき事象への批判がなされる。ルソーは「子供」の発見者として、そして「自然に帰れ」という標語を発した人間として理解され、そのように教育され、認識されてきた。世界でも稀であるらしいこの認識あるいは言説の形成過程をたどるのが本書後半の読みどころである。近代日本の文化の輸入につきまとう一種のゆがみを別括して興味深い、そもそもこの問題意識が本書の出発点にあるようである。私ははじめ本書をバック＝モースの仕事にたとえたいけれども、彼女の立ち得なかった視座をも提示していると言ってもよさそうだ。

ルソーは自らの子を放置しておきながら教育を語ったひどい人間であり、なるほど教育学の分野に限れば他の国々では今はそれほど読まれていないのかもしれない。しかし、内面の告白という制度、恋愛小説などの見地からはなおも植民地との関連が見直されていい作家であり続けているだろう。おそらくは世界初の感傷旅行と言っている世界周遊旅行で『新エロイズ』のサン・ブルーが南米の地に見たと主張する「巨人たち」について、富田と同じくらい真剣に語る者が現れてもいい。そしてまた、日本においてルソーが子供の発見者とされる過程には、「子供」との対比で記されたl'homme(人間)の語が「大人」と訳されたという事実も介入するというのだから、翻訳論の題材にもなりそうだ。

9. 事務局から

入会・資格変更（第181回理事会承認）

〈入会〉6名

〈会員種別変更〉5名（正会員→シニア会員3名、正会員→早期キャリア会員1名、早期キャリア会員→正会員1名）

会費納入のお願い

2024年5月の総会で承認されたように、会費の支払いは、原則オンライン決済システムをご利用いただくこととなっています。学会会費を未納の方は、学会ウェブサイトの「マイページ」にアクセスし、クレジットカード決済、あるいはコンビニ店頭でお支払いください。「マイページ」では納入状況を確認することも可能です。

「マイページ」にアクセスするための会員番号およびパスワードについては、2024年11月12日付の「オンライン決済のご案内」という件名のメールでお伝えしております。万が一メールが届いていない場合は、事務局までメールでご連絡ください。

なお、会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。

その他ご不明な点等ございましたら、事務局までメールでお問合せください。

編集後記

今回の編集作業は調査先のメキシコでおこなっています。いろいろと便利になるのはいいけれど、便利すぎると世界のどこにいても事務仕事から逃げられない、なんて思いながら。便利さのもたらす不都合は、調査の面でも感じます。研究を始めた20年前に通った文書館は、かつてはごちゃまぜの文書の束を箱ごとどさっと渡されて、あとは必要なものを自分で時間かけて探したのですが、今では分類されてパソコンで検索もできるようになり、だいぶ効率が良くなりました。でもその一方で、自分の探しているテーマ以外の文書を見ることが少なくなり、思わぬ発見をする機会もほとんどなくなってしまいました。

とはいえ、いくら便利になっても変わらないものもあります。例えば、メキシコシティの空港に着いたらすぐに感じる、下水とトウモロコシが混じったようなあの微妙な匂い。メキシコ人にとっては恥ずかしいあの匂いも、僕にとってはメキシコに戻ったことを実感させてくれる良い匂いです。あるいは、ユカタン州メリダの行きつけの屋台で食べるコチニータ・ピビル。伝統的な土中の窯（ピビル）で作られた本場の味は、いくら材料を集めても日本では再現不可能です。日本に帰ったら、またそんな匂いや味が恋しくなるのでしょう。

（川上英）

日本ラテンアメリカ学会 No.146

2025年3月31日発行

学会事務局

（会員情報の変更、入会・退会のご希望、学会HP内のマイページに関するお問い合わせ）

国際文献社

ajel-post@as.bunken.co.jp

（その他のお問合せ）

神田外語大学 磯田沙織研究室気付

ajel.jalas@gmail.com